

日本について

『原爆の子』広島島の少年少女のうたったえは、原爆投下から6年後の1951年、長田新により岩波書店から刊行された原爆体験文集です。

1945年8月6日広島市の原爆に被爆した教育学者・長田新は、被爆した少年少女の手記を集めて平和教育の研究資料とする計画を立てました。彼は学生とともに作文用紙を持参して広島市内外の小・中高・大学、さらに孤児収容施設などを巡回し、手記の執筆を依頼しました。この結果、1、175名の手記が集められ学生により清書されました。2009年までの時点で14の言語で翻訳、世界中に出版されています。

私の平和への思い

この話を読んで最初に思ったことは、原爆は悲惨なことです。今の時代を生きる私達は、戦争ということを経験したこともないし見たこともありません。

ですが、色んな方の体験談をきいたり、この本を読んでも、実際に体験しなくても、広島にいてなくても心は悲しい思いがこぼれます。

8月6日、9日は、日本にいても、世界中にいても忘れられず、日だ"というのを改めて、実感します。

今の小学生の子達、おとな世代の子達にも、今の私達の子達のように、戦争について、平和について、考えてほしいと思います。

